

指方立相の教義に就て

——導師より問師へ——

石 橋 誠 道

宇宙のあらゆる萬象は生成變化して窮りなく轉變限りなきものである。科學文學は言ふも更らなり、變化のなかるべき哲學宗教の領域まで往々それが侵略する。指方立相の問題は我が宗としては最も重要な問題であるが、これさへ多考へ方をかへねばならぬではなからうか、大に考慮を要するのである。

言ふまでもなく佛教は八萬四千と稱せられ、支那に譯された經論でも七千餘卷の多數にのほり、その内容は千差萬別であるにも關らず、極樂淨土は西方の一所に定められ、未だ曾てその他にあることを耳にしない。されば古の人々は西方淨土を疑ふものなく、指方立相の教義に於て疑義を懷いた者は殆んどなかつた。然しながら斯る時代は既に已に過ぎ去つた。苟も近代の思想に觸れ科學の理論に洗禮を受けたものは、其の安心が許されなくなつた。それが爲に古來幾多の先徳が大に頭を悩ました。それらの中でも彼の有名な佐田介石が、奮然として起つて天文を研究し、天動の説を主張したのは勿論佛教の須彌説を擁護するのが目的であつたらうが、蓋し淨土の問題に就ても少からず煩悶を續けた結果であらう。固より佛教は印度の古説須彌説を採用した爲に、其の須彌説に反對である地動説が西洋から傳

はつた時には、我が國の佛教徒は之を聞いて非常に驚いたに違ひない。然し佛教に忠實なる介石は、憤然として之れが解決に身命を獻けた。

今から見ればそれは或は無益の苦勞であつたかも知れないが、其志たるや實に稱歎すべきである。恐くは當時介石は、若しも須彌説が破はるゝならば佛教全體が破滅するであらう、釋尊の説き給ふた須彌説が、若しも誤りであつたとすれば、佛教の教義全體が、誤りとして傳へらるゝであらうと大に憂慮したことであらう。これが自ら介石をして慨然として立ち上らせた原因であらう。謂ゆる愛宗護法の精神、佛教擁護の神聖なる熱意が、天文曆象の研究として頗る潑刺たる元氣を以て顯はれたのであつた。佐田介石は肥後國小島の玉泉寺(眞宗)の住職であつたが、十八歳の時京都に來つて佛書を學び、東福南禪の二寺に留り、鍛練すること十餘年、適ま森尙謙の護法資治論を讀み、『佛法の大難は地理より起る』と云ふ條に至つて大に悟る所あり、地球の説が佛曆を破らんとするを憂ひ、慨然として起つて天龍寺に至り、寰中禪師に謁して佛曆の事を尋ねたが、未だ充分に理解することが出来なかつたので、靜地を選んで隱栖し、白晝戸を閉ぢて燈を點じ冥心默坐十餘年、隣里の人々之を稱して無晝庵と言つた。而して遂に恍然として兩象を見るの理を悟り、乃ちその器を作り天動等象記を著した。介石は又經濟の術に達し國家の形勢を憂慮して、數しば朝廷及び幕府に獻言したのみならず、自ら進んで護國報國の事業をした。この後この師の思想を承けて勤王護法の運動に盡瘁する者甚だ多く、我宗の養鷹徹定上人、聖光寺の神阿隆音上人も亦たその列にあつた人である。

二

回顧すれば數十年の昔、余が未だ若年であつた頃、余の師三河貞照院の住職太田大信師が、山崎辨榮上人を貞照院

に招聘して一場の法義を親しく拜聽されたことがあり、余もその席に列つた。然るに當時辨榮上人は米粒に名號を書いて下さると云ふので有名であつたが、未だ教師補の資格さへなくて高座に上つて説教さるゝ事は遠慮されつゝあつた時代である。上人は貞照院の奥の座敷で懇ろに話して下さつた。その時師匠の太田師が、自己の疑問を質問された。『近來地球回轉の説が世間に喧しく傳へられてあるが、果して地球が回轉するか、或は天の日月が回轉するのでありまじやうか』と尋ねられた。この時上人の御答は斯うであつた。『この地の動くと言ふ説は、既に釋尊の時代にもあつたのである。或る時外道が釋尊に對つて、私はこの地が動くものと考へますが、天が動くのでありますかと尋ねた。その時釋尊が答へ給ふた。汝の考は誤りである。若しも汝の言ふが如く、この地が動くものとすれば、少しも風のない時に、中天に向つて弓を射よ。若しも地面が動くならば、その矢は必ず己れの處には落ちないであらう。然るに若しも風なくんば、その矢は必ず汝の居る處に落つるであらう。これが正しく地の動かない證據であると仰せられた。されば地動は信ぜられない』と。これが上人の御答であつたが、然しながらこれは當時上人の心からの信念であつたか、或は對機の説法であつたか、その邊は能く解らないが、尙ほこの當時地球回轉に關する説が寒村僻地にも存在して問題視せられつゝあつたことは確實で、その一例話として、敢て之を記すことゝした。

地球が回轉するかしないかは今時それは問題ではない。事實が既に證明して一點の疑ふべき餘地がない。西方があるかないかと云ふことも是れ又更らに問題ではない。曾て吾々が考へた如き西方は或はないかも知れないが、事實西方はあるべき筈である。地球が回轉するとしても、地球以外の宇宙全體が回轉すべき理由はない。宇宙が回轉しないとすれば、東西は必ずある可き筈である。既に西方があるとすれば、極樂淨土の方處に於て、何の疑を生ずべきや、

經文に既に十萬億の佛土を過て世界ありと云ふ。この十萬の土の中には、動あり不動あり千種萬様であらう。されば西方の淨土をばどうして否定することが出来ようか。但し斯様に言ふのみでは、世人は恐くは満足しないであらう。蓋し吾人の信仰の上に最も大切であることは、如何にして彌陀を信ずることが出来るか、どうして眞實の信念を獲得することが出来るかと云ふ問題である。これは古來の先徳が最も悩みぬいた問題である。然るに世人は機根が甚だ區々である。或は智慧の勝れた人、或は情意に執はるゝ人、或は愚鈍下智の人等、必ずしも之を一定することは出来ない。しかのみならず同一人でも、知識の進むに従つて、信念の内容がたえ間なく變つてゆくに違ひない、これを以て信仰の世界と云ふものは、一律を以て規定することは出来ない譯がある。一例を舉れば余は曾て石川博士から博士の信仰の歷程を聞いた。其話に云く、余の未だ幼き時、祖母は必ず余を伴つて朝夕佛間で念佛するのが常であつた。而して常に阿彌陀如來の尊きこと、念佛の有り難きことなどを聞かされた。これに依て余は純眞な信仰を持ち、佛を厚く信仰したが、その後漸く中學に入り、大學に進むに従つて、その信仰は破壊された。然しながらそれではどうも満足が出来ずその後色々煩悶し、切りに求道した結果、遂に信仰を復活して、唯だ一向に念佛すべしと云ふ結論に達し、日日夜々になす仕事も皆な是れ念佛であるといふ解決を得るに至り、大に安心することが出来たと申された。更らに又彼の京大の仁保博士が一人の愛子を失つたことから目覺めて、非常に熱心に求道された結果、悲哀のどん底から法悦の微笑に運命の轉換が出来たといふことを曾て余に話されたが、その事がまた雜誌淨土の中にも自ら告白されてある。依て余は今参考の爲に、こゝにそれを轉載することとした。

仁保博士の淨土教入信の記の一節に云く、智者もまた濟はる。智識の價值を思ふ者が宗教に入り難しとせば、かの

宗祖法然上人の如きはどうかであらう。上人が求道の志の切にしてその努力の尋常ならざる、叡山に於ける十數年の苦學のあとにこれを見るべく、當時一切經を讀破すること六度に及ばれたと傳へられてゐる。天性聰明に加ふるにこの學問を以つて、上人の名は智慧第一の法然房と呼ばれて、南都北嶺の學匠の中に鳴り響いたではないか。若し智慧が絶對的に信仰の障礙をなすものならば、上人は永久に淨土門を開き得なかつたであらう。曇鸞も善導も龍樹も天親も、釋尊もみなひとしく到底教は立てられなかつたであらう。思ふに入信の道には三つある。その一は直信と申して直覺的に信する道で、談理言説を絶した心理の妙境はこれである。その二は種々の奇蹟に逢ふて、佛神の存在を事實の上に認むるもの即ち證信と云ふはこれである。而してその三つこそ知識の及び得る極限を究めて、神佛の本體に歸入する道であつて、教にはこれを智信と名けてゐる。而してこの最後の道こそ、私どもの踐み來りなほ現に踐みつゝある所のものではないか。直信證信智信とこの三つの道があつて、始めて愚劣も救はれ、智者も救はれ、善人も惡人も、賢不肖もみなともに彌陀の光明に攝取せられて餘すところは無いのであらう。されば法然上人が愚鈍の身になしてと仰せられたのは、あながちに智者そのものを斥けられたのではなくて、謂はゆる智者の振舞を忌み、智者にありがちの高慢を排して、あらゆる人間は宇宙の根元たる佛の前に己れを虚ふして跪くべきを教へられた法語であると心得てよからうと思ふ。

私は專攻をする法理學において、勢力説を取る者であることは前に述べた。而してこの學説が淨土宗の信仰に毫も牴觸せざることを併せ述べた。何故に牴觸しないかとなれば、教の示す所の佛は、宇宙萬物の大勢力の根元に外ならないからである。而してこの大勢力は、萬物の秩序を維持する所の大慈悲の力である。力を佛の姿とすれば慈悲は

佛の心である。力の本質は慈悲であり、慈悲の形體は力である。宇宙間の森羅萬象、地上幾千萬の人類の生や死や、一として此の大勢力に依らざるなく、この大慈悲に漏るゝものはない。私は斯く思念することに依て、私の畢生の學は大盤石の上に、その基礎を置くことが出来た。(淨土、昭和十二年六月號)

以上は仁保博士の信念告白の一部であるが、博士はスピノーザの勢力説に共鳴して居られた爲に、自ら勢力的に阿彌陀佛を理解されたやうである。然しながら兎も角斯様に安心立命した人は幸福である。而して觀經の説き方は、固より凡夫を本意とし、情意を主として説かれてあり、我宗はまたこの經に依て建立された宗旨であるから、情意を主とする立場に立ち、指方立相の方法に依て、信念を固むることが必要である。この意味に於て彌陀の淨土は西方にありと説かれたのである。

三

今我が宗に於ける指方立相の問題は、善導大師の散善義の指方立相といふ言から始まつた。即ち我宗に於ける信仰の對象阿彌陀如來を念ずるに、指方立相の立場に於て、吾々の信念を固めるのが、最も適當な方法である。彌陀を信念する用心に就ては、種々様々の立場があつて各宗何れも異つてをる。即ち天台宗の如きは、唯心の彌陀已心の淨土といふ立場に於てし、又禪宗は心性の彌陀を見破らんとする立場にある。故に今この下に於て、敢て此等の説を擧げて、讀者の參考に供したい。

即ち天台宗に謂ゆる唯心の彌陀と稱するは、我がこの個人の心の外に、全く彌陀がないと云ふのではない。彌陀は固より西方の十萬億土の彼方の淨土に在すことは言ふまでもない。がその西方の淨土も彌陀もみな我が心に外ならず

萬法唯心なるが故に、彌陀は即ち我が心中の彌陀であると解するのである。これは即ち吾人の一念の心中に、三千の諸法が悉く具さに收まると云ふ立場から見た考へである。故に天台の二百題に、圓頓の行者は萬法唯心の旨に達するが故に、彼の安養の境に託すと雖も、依正同じく一心に居すと了す。故に終日佛を觀するは終日心を觀するなり。何んぞ單に西方の彌陀を念すと云はんや。故に觀經の如き觀佛を以て題目とするに、疏には(妙宗鈔)心觀を以て宗となす。これ大乘の妙觀を示すなり。是の故に四明尊者の融心解に云く、經に云く、諸佛の法界の身、衆生心想の中に入る。是の故に心に佛を想ふ時、この心即ち是れ三十二相なり、この心佛を作る是の心是れ佛なりと。疏には感應道交、解入相應の釋をなす。若し初の釋なくんば則ち觀佛に非ず。若し次の釋なくんば生佛體異なる。二釋相成す是れ今の觀法なり。これ則ち初の義は西方の佛を觀することを顯はし、次の義は我が心性に即することを顯はす。既に二釋相成す是れ今の觀法なりと云ふ。若し但だ西方の佛を念すと言はば何んぞ大乘の觀法を顯はさんやと。以上。即ち天台宗では摩訶止觀の説に原いて、吾人の一念の心の中に十界三千の性相を具足すると説くが故に、佛界から地獄界まで十界の依正色心は、皆な一念に具すと云ふ。故に極樂は經説の如く十萬億の彼方に在るが、しかもそれが吾人の心の外の存在であると思ふてはならない。故に終日西方の彌陀を觀するは即ち吾人の心の彌陀を觀するのであると解釋するのである。(往生淨土決疑行願二門、觀經妙宗。鈔第一、元照の觀經義疏卷上等)

四

すべて物は立場に依つて各の見方が違つて來る。一水四見の譬もあり、猿澤の池の例話もある通り、どうしても己れの學解を基礎として解釋するのが當然であるが、禪家は維摩經に説く所の隨其心淨即佛土淨の教義に従ひ、直ちに

心性を悟り得れば、即心即佛であると云ふ理に原き、彌陀を吾人の心の中に探し求めんとする行き方である。この點に於て我宗や天台宗とは大に其の趣を異にする。その要領を最も解り易く説き示してあるのは彼の六祖惠能大師の法寶壇經であるから、今この下に之を抄出することゝした。(大正藏四八)

韋刺史又た問ふ。弟子常に僧俗が阿彌陀佛を念じて西方に生ぜんと思ふを見る。請ふ和尚彼こに生ずることを得るや否やを説いて願くは爲に疑を破れ。師言く、使君善く聽け、惠能爲めに説かん。世尊舍衛城中に在て西方を説いて引化すること經文分明なり。此を去ること遠からず。若し相説を論ずれば、里數十萬八千あり、即ち身中の十惡八邪なり。便ち是れ遠く説くは其の下根の爲なり、近く説くは其の上智の爲なり。人には兩種あり、法は兩般なし。迷悟殊りあり見遲疾あり。迷人は念佛して彼こに生ぜんことを求む、悟人は自らその心を淨む。所以に佛の言はくその心淨きに隨つて即ち佛土淨しと。使君は東方の人なり但だ心淨ければ即ち罪なし、西方の人と雖も心淨からざれば亦た愆あり。東方の人罪を造り念佛して西方に生ぜんことを求む、西方の人罪を造れば念佛して何れの國にか生れん。凡愚は自性を了せず身中の淨土を識らず。東を願ひ西を願ふ悟人は在處一般なり。所以に佛の言はく、所住の處に隨つて恆に安樂なりと。使君心地に但だ不善なければ、西方此を去ること遙かならず、若し不善の心を懷けば念佛往生到り難し。今善知識に勸む先づ十惡を除いて即ち十萬を行ひ、後に八邪を除いて乃ち八千を過れば、念々に性を見て常に平直を行ひ、彈指の如くに便ち彌陀を覩る。使君但だ十善を行へ、何んぞ往生を願ふべけんや。十惡を斷ぜずんば何れの佛か來迎せんや。若し無生の頓法を悟れば、西方を見ること只だ刹那にあり。念佛を悟らずして生を求めば、路遙かにして如何んぞ達することを得んや。惠能諸人と與に西方に刹那の間に移り、目前に便ち見ん、各の見んことを

願ふや否やと、衆皆な頂禮して云く、若し此の處に見ば何んぞ往生を願ふ可き、願くは和尚慈悲を以て、便ち西方を現じて普く見ることを得せしめよと。師言はく、大衆よ世人の自らの色身は是れ城なり。眼耳鼻舌は是れ門なり。外に五門あり内に意門あり。心は是れ地なり、性は是れ王なり。王心地の上に居り、性在れば王あり、性去れば王なし。性在れば身心存す、性去れば身壞はる。佛は性中に向つて作れ、身外に向つて求むることなかれ。自性迷へば即ち是れ衆生なり、自性覺れば即ち是れ佛なり。慈悲は即ち是れ觀音、喜捨を名けて勢至となす。能く淨むるは即ち釋迦、平直は即ち彌陀なり。人我は是れ須彌なり。貪欲は是れ海水なり。煩惱は是れ波浪なり。毒害は是れ惡龍なり。虛妄は是れ鬼神なり。塵勞は是れ魚鱉なり。貪瞋は是れ地獄なり。愚痴は是れ畜生なり。善知識は常に十善を行つて天堂便ち至る。人我を除けば須彌倒れ去る。貪欲の海水竭き。煩惱なく波浪滅し。毒害除き魚龍絶し。心地の上より覺性の如來、大光明を放つて六門を照し。清淨にして能く六欲の諸天を破し。自性内に照して三毒即ち除き。地獄等の罪一時に銷滅す。内外明徹にして西方に異らず。此の修を作さずして如何んぞ彼こに到らんや。大衆説を聞いて了然として性を見る。悉く皆な禮拜して俱に善哉と歎すと。以上は六祖壇經の説であるが、淨土他力の行き方とは全くその方向が違つてをる。即ち見性即往生、性を見るものは彌陀を見る、彌陀も淨土も遠からず、觀じ來れば我が心に在りと云ふ見方で、全く智的自力的聖道的悟解の見方である。禪關策進、蓮宗寶鑑、歸元直指、淨土或問、淨土旨訣等の中に、禪家の知識の彌陀に對する信仰が述べられてあるが、大體に於て皆なこの見性的の見方である。

五

次に我宗の善導大師は、定善義に於て定善十三觀を釋する中、第八像想觀を釋するに際し、『諸佛如來は是れ法界身

なり、一切衆生の心想の中に入り給ふ』と云ふ文を釋して、指方立相の旨を述べられた。今この諸佛如來と云ふは、阿彌陀如來のことであるが、この彌陀如來が法界身であると云ふことが問題である。抑々法界といふ言の中には、事的と理的との兩方面がある。若しこの法界を事的に解すれば、法とは一切の諸法であり、界とは分界の意味である。諸法が各の異つて、差別不同なる有様を此を名けて界と云ふ。故に諸法の一々は何れも法界と稱せられ、或は萬法を總稱して、之を法界とも言ふのである。是れは即ち事物其物を法界と云ひ、即ち事的の法界である。次に理的の法界とは、一切の諸法の根本である眞如の理性そのものを指して法界と云ふのである。故にこれを眞如、法性、實相、實際等と云ひ、いづれも同體異名である。而してこの時は界の意味は即ち因の意味であり、或は性の意味である。因とは總ての聖法は皆なこの眞如を原因として生じ來るからである。性とは眞如は一切の諸法の所依の本性であるからである。

然るに善導以前の諸師は、この事理法界の中に於て、多くは理法界の義を以て、法界身を解釋されたが、善導は獨り事法界の立場に立つて解釋された。これが諸師とは大に異なる點である。故に善導は定善義に、諸師の説を難破して云く、『或は行者あつて此の一門の義を將つて、唯識法身の觀となし、或は自性清淨佛性の觀となすは其意甚だ錯れり、絶へて少分も似たることなし』と痛撃された。この中善導が行者と言はれたのは、何人であるか解らないが、古來之は善導以前の淨影天台等の諸師を指したものであらうと言はれてある。即ち善導の考に依れば、諸師が第八像想觀の法界身を觀するに、或は唯識唯心の立場に立ち、或は眞如佛性の立場から法身の如來として觀するのはそれは大なる錯である。法身は眞如の理性と同一であるから無相である。然るに經文に既に三十二相を具すと言はれてあるか

らには、報身として觀するのが當然である。諸師が法身と考へたのは全く誤解であらねばならぬと主張された。

六

更らに法界身に對する善導の説を委く。記せば、善導はどこまでも凡夫を本位とせられたから、有相的情的に説明せんと企てられた。故に法界身の解釋が、諸師の考とは全然異つて、事法界と見て解釋された。されば定善義に云く、法界と云ふは三義がある。一には心徧するが故に法界を解す。二には身徧するが故に法界を解す。三には障礙なきが故に法界を解す。正しく心到るに由るが故に身も亦た隨つて到る。身は心に隨ふが故に是れ法界身なりと云ふ。法界と云ふは是れ所化の境、即ち衆生界なり。身と云ふは是れ能化の身、即ち諸佛の身なり。衆生の心想の中に入ると云ふは、乃ち衆生念を起して、諸佛を見奉らんと願すれば、佛は即ち無礙智を以て知り給ふに由て、即ち能く彼の想心の中に入つて現す。但し諸の行者若くは想念の中、若しは夢定の中に於て佛を見奉るは即ち此の義を成するなりと言はれてある。

即ち善導は法界身を有相的事的に解釋し、三義を以て説明されたが、その中心徧するが故に法界を解す、身徧するが故に法界を解すと云ふは、阿彌陀如來の身心は法界の衆生の心想の中に（阿彌陀佛を信する衆生）徧く來入し給ふが故に法界身と云ふのである。又障礙なきが故に法界を解すと云ふは、衆生の心想の中に出入し給ふこと自在無礙なるが故に法界身と云ふのである。

然るに諸師は善導の如く淨土の彌陀の身心が出入するとは考へなかつた。即ち如來でも衆生でも法身は同じく同體であるから、衆生の心想の中に現する佛は即ち如來の法身であると與に、また衆生の法身であると考へた。故に淨影

の觀經義疏には諸佛の法身は己れと同體なるが故に、現に佛を觀する時心の中に現するものは、即ち是れ諸佛法身の體なれば經には是れを是の心是れ佛なりと云ふと記されてある。

然しながら善導はこの説に全く反對であつた。即ち善導の意に依れば、今この法界身が衆生と同體の法身なれば、即ち眞如法身であらう。既に眞如法身なれば、眞如に相好のある譯はない。然るに經文には明らかに三十二相を具すと云ふ。既に相好があるとすれば、それは眞如法身であるとは言はれない。眞如は無相にして虚空の如く、相を絶し念を離れたものでなくてはならない。既に經文に相を説いて如來が説明してあるからには、これは當然報身有相の示現でなくてはならないと主張された。故に定善義に諸師の説を破して云く、或は行者あつて此の一門の義を將つて、唯識法身の觀となし、或は自性清淨佛性の觀となすは其の意甚だ錯れり、絶へて少分も相ひ似たる事なし。既に像を想へと云つて三十二相を假立せば、眞如法界の身豈に相あつて縁すべく、身あつて取るべけんや。然るに法身は無色にして眼對を絶す、更らに類として方ぶ可きなし、故に虚空を取て以て法身の體に喩ふ。又今この觀門は等しく唯だ方を指し相を立て、心を住して境を取らしむ、總べて無相離念を明さず。如來懸かに知り給ふ、末代濁惡の凡夫の相を立て、心を住するすら、尙ほ得ること能はず。いかに沉んや相を離れて事を求るは、衝通なき人の空に居して舍を立るが如しと。

蓋し善導は散善義の深信釋の下に於ては、自身は現に是れ罪惡生死の凡夫と言はれ、又散善義の終には、余は既に是れ生死の凡夫にして智慧淺短なりと仰せられた如く、既に御自身を凡夫と考へ、斯る凡夫を救濟するのが即ち彌陀の本願であり、また觀經の目的である。されば觀經の説き方は、いづれも凡夫救濟の事相、有相を以つて説かれてあ

る。然るに諸師はその意を解せず、妄りに高尚なる理論に走つて、法身と解するのは錯りである。指方立相の立場に立つた教義が即ちこの觀の真相であると主張された。之を要するに善導と諸師とのこの觀に對する意見の相違は、諸師は主觀的立場に立つて、自己の法身を彌陀として觀じ、善導は彌陀を客觀的に認めて報身として觀する所に、大なる異りがあるのである。然しながら宗教としては、これが大なる問題で、これが即ち自力と他力との分岐點である。吾人が客觀に彌陀を認め、その偉大なる救濟力に救はれんとする愈願に、他力救濟の信仰が自ら起り來るのである。その客觀の對象は指方立相の方法に依つて、認むることが最も適當であることは言ふまでもない。然れば善導がこの點に、大に力を用ひられたことは、また當然のことである。

言ふまでもなく吾々は、有形有相の國に生れ、有相の生活を續くる限りは、一時一刻の間と雖も、有相の念を離るゝことは出來ない。すべて何事も有相に依て了解し有相に依て進退し、有相に依て活動しつゝあるではないか。されば淨土を了解し、彌陀を信仰する上にも勿論有相的であることが、最も適當ではあるまいか。吾人が先祖の偉徳を彰はし英雄偉人の功業を傳ふるにも、必ず何等かの有形の形式を取り、而して之を尊敬し崇拜するのが常である。吾人が神社佛閣に參拜し名所古跡を巡拜するも、またこの形式を取つて以て懷古敬虔の念を起し、崇高の念に打たるゝのである。この意味に於て宗教は指方立相の形式に依るのが、最も適當と思はるゝ。謂はゆる信は莊嚴よりと云ふ言も、斯る消息を洩したものはあるまいか。

七

然しながら人類は、唯だ情のみでは決して満足するものではない。情の裏面には必ずや智的理性が働かなくてはな

らない。即ち知情意の三方面がいつも不離の關係をたもつべきが當然である。而して前にも述べた如く、この觀經は大體に於て、情的有相的に説明されてあるが、又往々にして智的理性的に考へなくてはならない所のあることを忘れてはならぬ。例へば第九佛身觀の如き、佛の身量の説明は、實に偉大なものであつて、到底普通の情量では、了解することは困難である。即ち彌陀の身量を示して、佛身の高さ六十萬億那由他恆河沙由旬なり、眉間の白毫は右に旋轉て婉轉せり五つの須彌山の如し、佛眼は四大海水の如くにして青白分明なり、彼の佛の圓光は百億三千大千世界の如しと言はれてある。是は實に廣大無邊の相であつて、普通一般の常識では到底解釋することの出来ない數量である。然るに列祖の中に於ては、この文に對して委しい説明を試られた人がないやうであるが、獨り義山上人は觀經隨聞講錄に於て、靈芝の元照の觀經義疏などを参照して、一應之れが説明を試みられた。即ち義山の説に依れば報身如來は所證の理が、實に無邊である所から、能證の智も亦た自から無邊である。既にその智が無邊であるから、その身も亦た無邊際であらねばならぬ。然しながら今は所觀の境を取る爲に、暫く分量を説いたのである。その實能觀の者の所見に隨つて、身量は自ら不同である。佛身に身量がある譯ではない。只だ是れ非數量の上に數量を説いて六十萬億等と言つたのである。故に下の雜想觀には、先に説きし所の如く、無量壽佛は身量無邊なり、これ凡夫心力の及ぶ所にあらず。或は大身を現すれば虚空の中に滿ち、或は小身を現すれば丈六八尺なりと言はれてある。故に六十萬億等と云は是れ即ち非數量なりと言はれてある。以上。これは即ち普通一般の常識を以ては考へられない所の説明であり、無邊の法身を有相的に説明したかの如くにも思はるゝ。

而して問師の頌義三十卷淨土の實義を釋する下にはや、法身的に説かれてある。即ち問師の考に依れば、極樂淨土に三輩があり、九品があると説くは方便である。其の實上下の差別もなく、聲聞菩薩人天もない。往生すれば成佛し平等法身無極の佛果、大般涅槃を證得する。故に無量壽經に云く、彼の佛の國土は清淨安穩にして微妙快樂なり、無爲泥洹の道に次けり、その諸の聲聞菩薩天人は、智慧高明にして神通洞達せり、咸な同く一類にして形も異狀なし、但だ餘方に因順するが故に天人の名あり、顏貌端正にして世に超へて希有なり、天に非ず人に非ず皆自然虛無の身無極の體を受くと。即ち餘方に因順して聲聞菩薩天人と云ふが實には其等の人はない、唯だ法身の佛のみである。虛無の身とは障礙なき法性の身と云ふ意である。無極と云ふは佛果のことである。論註の中には第一義諦妙境界の相と云ふ、第一義とは實相である。妙境界相とは即ち法身である。法身とは即ち平等である。平等は即ち是れ無差別である。無差別は是れ無相である。無相にして而かも相なるは、自然虛無の身無極の體である。然しながら即相不退の淨土の教は、見生即ち無生である。故に無生の人は無生の解を以て、而かも往生するのであるから、無生而生の往生である。見生の人は見生の心で無生を得るから、生即無生の往生である。然れば指方立相に即して、而かも無相であり得るのである。往生の見を改めずして當體即ち無生である。然れば則ち事相全く理性であり、見生全く無生である。故に善導大師の云く、佛の密意は窮深にして教門は曉らめ難し、三賢十聖も測て窺ふ所にあらず、況んや我は信外の輕毛なり、敢へて旨趣を知らんや。仰ぎ惟れば釋迦は此方より發遣し、彌陀は彼の國より來迎し給ふ。彼に喚び此に遣る豈に去らざるべけんやと。以上は大體問師の思想の要領であるが、問師は知情の兩方面を見生即無生の義に依つて、巧みに調和結合された。蓋し問師の時代に於ては禪宗が甚だ盛んであつて、高尚なる理論をもてあそび、見性の

研討甚しく、單なる情的説明では、世人が満足しなかつたであらう。仍ておのづから我宗の教義も智的説明を用ひなくてはならなかつた結果、斯る説明を用ひられたものであらう。

惟ふに觀經の中心は第九の佛身觀である。故に鎮西上人は、觀經十三觀は中高かであると仰せられたがその意味は、十三觀の中では佛身觀が中心であると云ふ意である。さればこの彌陀を中心とする三尊觀が最も大切であることは言ふまでもない。この大切な三尊は、知情意の三が完全に具はります相である。即ち意志と智慧と慈悲とが、最も完全に結合し調和されたるかたちである。吾人は朝夕如來を拜し、その救済を仰ぐことに依つて、自ら光攝の靈化を蒙り、漸く完全なる人格に進みゆくこそ本望である。如來は即ち靈體である。宇宙を照す太陽の如く、暗夜を照す皎月の如く、智慧と慈悲との光を以て、普く人類を救済する完全圓滿な靈格であるが、特に宗教の立場から更らに他力の方面から、佛心とは大慈悲是れなりと觀經に説かれたのではあるまいか。これより推して佛心とは大智慧是れなりとも説かる可き筈である。之を要するに客觀的に、如來の偉大なる靈格を認めて、すべて己れの情量を捨て、深く信じて疑はず、無知の輩に同ふして、唯一向に念佛すべしと云ふ信念に住するのが、指方立相の教である。